

日本語難易文の名詞化について*

藤巻一真

東京国際大学

本稿では、「方」接辞と同様の特性を示す「さ」接辞による日本語の難易文の名詞化を取り上げ、その構造と意味役割(付与)に関する問題について議論する。特に Hoshi 2002 等で主張されている θ -理論を仮定し、主要部直接付加構造による分析を試み、藤巻 2003 に引き続き、その妥当性を検討する。同時に、主要部直接付加構造における主語の問題についても議論する。もしここでの分析が正しいとすれば、この θ -理論の説明できるデータの範囲が難易文の名詞化と、可能性としてはその元になる難易文自身にも拡張されることになり、その妥当性が一步増すこととなる。

1. はじめに

日本語の難易文(tough 構文)の分析は、井上 1976, 1978, 2004a, b, Kaneko 1994, Kuroda 1987, Saito 1982, Takezawa 1987 等があり、この構文の特性と理論上の問題点を扱っている。これらにおいて扱われている主な問題点として、日本語の難易文における「が」格名詞句の認可の仕方、移動の関与とその種類、意味役割(付与)の問題等が挙げられる。次の例で具体的に見てみる。

- (1) a. 学生にとってこの辞書が使いやすい。(Inoue 1978)
- b. 雅夫にとってこの郵便局からが小包が送りやすい。(Kuroda 1987)

* 本研究は井上和子先生主催の研究会で発表させて頂き、井上先生を初め伊藤健人、大倉直子、上田由紀子、綿貫啓子の各氏から貴重なご意見を頂いた。また、星宏人氏からは CLS 言語コロキアムの際及び電子メールにて、氏の意味役割理論に関して詳しく説明して頂いた。また、長谷川信子先生、山田昌史氏からもコロキアム等でご意見を頂いた。この場を借りて感謝の意を表す。本稿における誤り等は全て私個人によるものである。

先ず、「が」格名詞句について、補文の述語の目的語である名詞句に「が」格がどのように認可されるのかという問題である。上記の例においては「この辞書が」や「小包が」における「が」格認可の問題である。次に、これと直接関連する移動の問題であるが、「が」格を認可するのに「が」格名詞句が移動をするとするか、「が」格名詞句が基底生成されるかという問題がある。例えば(1b)の「この郵便局からが」を移動させるのかそれとも基底生成するのかということである。また、Chomsky 1977 以後英語の tough 構文には、wh(演算子(operator))の移動が関与していると分析されているが、日本語の難易文にはそれが関与しているのかという問題がある。最後に、英語の分析において大きな問題となっているのは、tough 構文における主語の意味役割の問題である。

- (2) a. This book is tough for John to read.
b. It is tough for John to read this book.
c. この本が太郎にとって読みにくい

(2a)における主語である this book の意味役割は、どこから与えられるのかということである。日本語においてはこの問題があまりはっきりしないが、「この本は」の意味役割がどこから与えられるかということである。これと関連して、(2a)の主語の位置が θ 位置なのか非 θ 位置なのかという問題があり分析が分かれている。個々の分析をここで述べる余裕はないが、主な論点は明らかであろう。

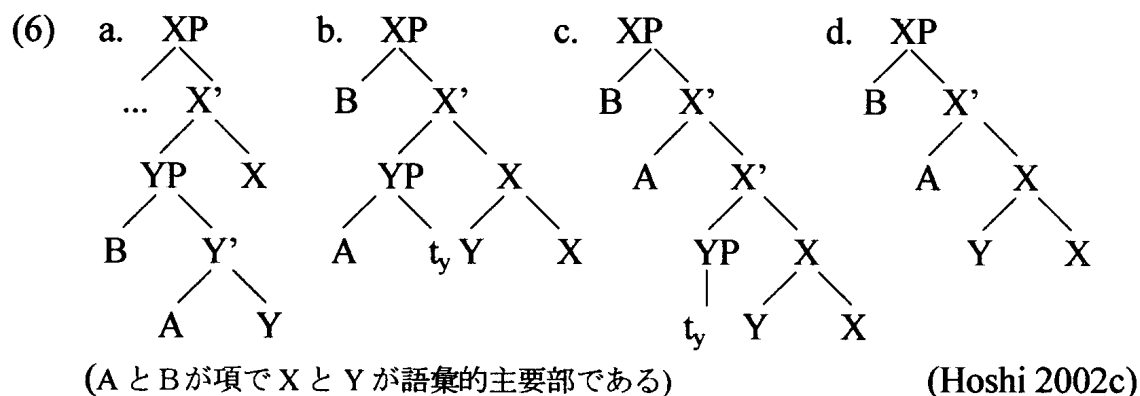
本稿は、以上のような難易文における問題があることを踏まえた上で、文と名詞句の平衡性という観点から、難易文に対応する名詞句（便宜上名詞化と呼ぶ）においてどのような問題があるかを考察するものである。難易文の名詞化とは次のように「さ」接辞によるものをいう。

- (3) a. 学生にとってはこの辞書が使いやすい。
b. 学生にとってのこの辞書の使いやすさ
- (4) a. 雅夫にとってこの郵便局からが小包が送りやすい。
b. 雅夫にとってのこの郵便局からの小包の送りやすさ

分析の枠組みとして、難易文の名詞化と同じ特徴を示す名詞化接辞である「方」を分析している Hoshi 2002c を仮定する。D-structure を仮定しない極小主義の枠組みで、日本語の軽動詞等の分析から、意味役割理論の新たな方向が示されている。中でも重要なものとして(5)を提案している。¹

- (5) A predicate can assign θ -roles from anywhere at any point of the computation, as far as it is within the projection of a lexical category.
(Hoshi 2002c)

(5)によると、述語の意味役割は基本的に機能範疇 TP, CP の介在がなければ語彙範疇の投射内にある限りにおいて、かなり自由にどの位置からでも与えられることになる。²³この理論は、Hale & Keyser 1993 で提案され Chomsky 1995 以後 Hale & Keyser とは別の形で統語部門に取り入れられた構造・階層(configuration)に直結した意味役割の解釈とは大きく異なるものである。特に重要と思えるものは、X と Y を述語として A と B を Y の項とした場合に、もし X が Y の投射を直接選択するならば、以下の4つの可能性があるという点である。



¹ 詳しくは Saito & Hoshi 1994/2000 及び Hoshi の一連の研究を参照。

² ただし、その与えられ方は、UTAH 等の意味役割の階層(Thematic Hierarchy)に従ってなされるとしている。日本語の T(ense) に関して Hoshi では意味役割付与を妨害しないとしている。Hoshi 2003 では UTAH を外す方向での提案をしている。

³ UTAH については Baker 1988 を参照。D-structure を仮定しないモデルでの UTAH は Saito & Hoshi 1994/2000 等を参照。

(6a)は、A と B が述語 Y の項であり、Y の最大投射内で意味役割が与えられる。他の可能性は、特に構造を基に意味役割を与える（解釈する）理論においては、排除されている。先ず(6b)では、述語 Y の項 B が X の投射内にあり、その位置で Y が X に付加された時またはその後に Y から意味役割が与えられる。(6c)では、Y の項である A も B も X の投射内にあり、Y が X に付加された時またはその後に意味役割が与えられる。(6d)においては、そもそも Y が派生の初めから他の主要部である X に主要部直接付加(direct head adjunction)されている点が他のものと最も異なっている。その他の点は基本的に(6c)と同様で、Y の項 A と B が両方とも X の投射内にありその位置で Y から意味役割が与えられる。

以下、2節では難易文名詞句の分析の為に Inoue 1978 による日本語の難易文の4分類を展望する。3節ではそれを基にそれぞれの名詞化がどのようになるのかを観察し、意味役割付与に関する問題を提起する。4節では、先ず、それぞれの名詞化における構造として、難易文自身の分析を名詞化に適用する問題点を指摘する。次に、主要部直接付加構造による代案を提案し、意味役割がどのように付与されるのかを議論する。これを踏まえて5節では、難易文の名詞化における尊敬形と「自分」の束縛に関して、主要部直接付加構造を用いて主語をどう捉えるかという問題を提起し、その解決の方向性を示す。

2. Inoue 1978 における難易文の分類

Inoue 1978, 2004a, b において日本語の難易文が4タイプに分類されている。⁴それぞれ、難易形式がどのような補文を取るか、名詞句等の格パターンはどうなるか、難易形式がそれ自身どんな意味になるのかに関して異なる特性を持っている。本稿でもこの分類を基に名詞化を考察する。この節では名詞化を扱う前に、それぞれのタイプについて概略を見るこ

⁴ 何を難易文として扱うか、またその分類に関して Inoue 1978, Kuroda 1987, Saito 1982, Takezawa 1987 は、異なる見解をしている。Inoue の4分類に対する批判もあるが、ここでこれを分析の基礎とする。少なくとも分類が増えることはなさそうなので、4分類が一部

とにする。以下、この節の例文は、断りが無い限り Inoue 2004a のものである。(下線部等は筆者加筆)

2.1 タイプ1

先ずこのタイプの難易文は、典型的に(7)のような「～に (は) ～が～ やすい・にくい」となる。これは、Saito 1982 や Kuroda 1987 では、「～とって～が～ やすい・にくい」とされている。

- (7) a. 学生にはこの辞書が使いやすい。
b. 年寄りにはこの通りが買物がしやすい。

次に、このタイプは(8a)が示すように主語が動作主でないときには非文となり、さらに、(8b,c)が示すように補文の動詞が自動詞の時には他の項(付加詞)が必要となる。

- (8) a. * 若者には新しい流行が好みやすい。 (主語が動作主でない)
b. * 太郎に走りやすい。 (自動詞のとき他の項(付加詞)が必要)
c. 太郎にはこの道が走りやすい。

また、このタイプは「話者の判断」を表しているので、「～がる」と共起しない。

- (9) a. * 学生にはこの辞書が使いやすがっている。
b. * 太郎にはこの道が走りやすがっている。

2.2 タイプ2

2つ目のタイプは、格パターンとしては「～が (は) (～が)」となり他動詞の場合は目的語が「が」格で表示される。補文の動詞が自動詞でも他の項が不必要である。この点はタイプ1とは異なる。

- (10) a. 最近私は寝付きにくい 自動詞でも他の項は不必要
b. 私はけがをしていて歩きにくい

統合されて減ったとしても、名詞化の分類も減るだけであり、議論には影響ないと考える。

さらに、(11, 12)のように、このタイプは「ある行為に対する難易に関する主語の判断」を表すので、Kuroda 1973 における意味での reportive style の条件が働き、肯定文では主語が1人称でないときは、「～がる・らしい」等の形式が付かないと非文になる。この点もタイプ1と異なる。

- (11) a. * 君は寝付きにくい
b. * 太郎は歩きにくい
c. * 学生はこの辞書が使いやすい
- (12) a. 私はこの辞書が使いやすい
b. 太郎は寝付きにくがっている
c. 学生はこの辞書が使いやすいらしい

タイプ1の補文における動作主主語の条件はこのタイプにも該当するので(13)は非文となる。

- (13) *若者は新しい流行が好みやすい (らしい)

2.3 タイプ3

第3のタイプとして特に重要なことは、英語におけるこのタイプの難易文が作れないことである。補文の主語に対する条件として、動作主ではなく経験者または対象である。受け身文や非対格述語も補文の述語として取れる。

- (14) a. 洗剤は湯に溶けやすい。
b. 布が厚くて、針が通りにくい。
c. * Detergent is easy to dissolve in warm water.
d. * The cloth is thick, and the needle is hard to pierce it through.

また、(15)-(17)のように、補文の述語の項の格変化は、難易形式によるものではなく、補文内の要素（例えば受け身形式の「られ」や可能形式の「できる」等）による。

- (15) a. 我々は子どもの微妙な変化に気付きにくい。
b. * 我々が子どもの微妙な変化が気付きにくい

c. * We are hard to become aware of subtle changes in children.

(16) a. 高い所の張り紙は人に剥がされにくい

* Posters put up on a higher place are hard to be torn off.

(17) a. 私にはポリ風呂の掃除ができにくい

b. 聴衆には君の声が聞こえにくい

c. 良い候補者が見つかりにくい

* Good candidates are hard to be found.

Good candidates are hard to find.

d. あなたの説明はわかりにくい

* Your explanation is hard to be understood.

Your explanation is hard to understand.

これらの「が」格目的語は、補文の述語に拠るものであり、難易文における「がーを」交替によるものではない。また、タイプ3は話者の判断を表しているので、「がる」とは共起しない。

(18) a. * 洗剤は湯に溶けやすがっている

b. * 聴衆には君の声が聞こえにくがっている

2.4 タイプ4

最後のタイプは、基本的にはタイプ3と同様の特性を持つが意味解釈において異なる。タイプ3は、「ある出来事・行為の難易に関する話者の判断」であるのに対して、タイプ4は「ある出来事・行為の発生の頻度・傾向についての話者の判断」と解釈される。つまり、この場合の頻度・傾向を表す意味での難易文となる。これにより「がち」とは共起するが、「～がる」とは共起しない。

(19) a. 慌て者は事故を起こしやすい

b. 慌て者は事故を起こしがちだ

c. * 慌て者は事故を起こしやすがっている

(20) a. エリートは強い挫折感を味わいやすい

- b. エリートは強い挫折感を味わいがちだ
- c. * エリートは強い挫折感を味わいやすがっている

最後に、補文の述語が自動詞のときは、解釈が2通りあり、タイプ3とタイプ4の両方の解釈（つまり、難易と傾向の解釈）が可能である。

- (21) a. 冷凍肉は溶けにくい
- b. 規模の大きい悪事は露見しやすい
- c. ウナギの蒲焼きは酒の肴になりにくい

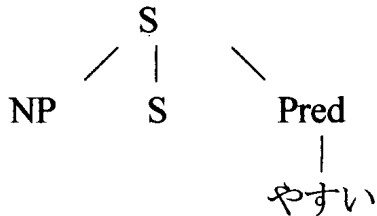
2.5 まとめ

前項までで Inoue 1978 の難易文の4分類を展望してきたが、主な点をまとめると以下のようなになる。

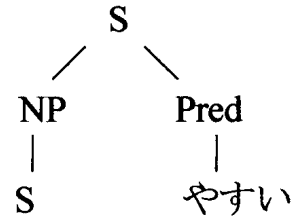
(22)	動作主条件	「がる」	「がち」	格変化	判断の主	意味
タイプ1	○	×	×	有り	話者の判断	難易
タイプ2	○	○	×	有り	主語の判断	難易
タイプ3	×	×	×	無し	話者の判断	難易
タイプ4	×	×	○	無し	話者の判断	傾向

それぞれの構造としては当時の枠組みではあるが概略以下の様になり、タイプ1・2は2項述語でタイプ3・4は1項述語と分析されている。

(23) a. タイプ1・2



b. タイプ3・4



これらを基に次節ではそれぞれのタイプの名詞化を観察することにする。

3. 難易文とその名詞化

この節では、前節での分類を基に難易文の名詞化における現象を取り上げる。難易文が名詞化できることは既に Sugioka 1984, 1992 等で観察され、さらに「方」による名詞化と同様の特性を示すことが示され、統語部門における名詞化として分析されている。⁵そこで本稿では、上記分類に従い、さらに詳しくタイプごとにその名詞化について見ていくことにする。これにより、特に問題となるのは、述語が名詞化されたときの項の具現化の仕方と意味役割の与えられ方であることを指摘する。

3.1 タイプ1の名詞化

まず、(24)がタイプ1であるが、その名詞化においては、「に」格で現れる項が何らかの原因で現れることができないが、「～にとっての」とすると述語の項が名詞化においても難易文と同様に具現化すると言える。

- (24) a. 学生にはこの辞書が使いやすい。
b. 太郎にはこの道が走りやすい。 (Inoue 2004a)
- (25) a. 学生にとってのこの辞書の使いやすさ
b. * 学生に (へ) のこの辞書の使いやすさ
- (26) a. 雅夫にとってこの郵便局からが小包が送りやすい。 (Kuroda 1987)
b. 雅夫にとってのこの郵便局からの小包の送りやすさ

ここで、注意したいのは「学生にとっての」や「太郎にとっての」は、意味役割としては経験者であるということである。勿論、この経験者というのは、難易文の述語の「やすい」から来るものであり、補文の述語から来るものではない。そうした場合、意味役割の問題が生じる。例えば、(25a)の「使う」の動作主はどうなっているのかという問題である。これに関しては難易文自身の分析にもよるが詳しくは4節で議論する。次にタイプ2の名詞化においても同様の問題があることを見る。

⁵ 「方」による名詞化では、統語的な使役形、受身形、尊敬形が付いたものを名詞化できることから語彙部門における名詞化ではなく統語部門におけるものであるとしている。

3.2 タイプ2の名詞化

(27)はタイプ2の難易文である。

- (27) a. 最近私は寝付きにくい。
b. 私はけがをしていて歩きにくい。 (Inoue 2004a)

タイプ2における主語が名詞化において「の」で表示されるとすると、以下のように難易文とその名詞化は平行性を示す。

- (28) a. [私の最近の寝付きにくさ]にはひどいものがある。
b. [私の歩きにくさ]を説明しませんでしたか。

この名詞化においても、動作主と経験者がどのようになっているかが問題となる。少なくとも「歩く」の動作主としての「私の」の解釈は当然であるが、難易形式の「にくい・やすい」を経験し、Inoueの言うようにそれを判断しているのがその主語であるとすれば経験者も「私」と考えられるからである。

また、タイプ2は、主語の判断を表すので一人称以外の主語では「がる」等の形式が必要であったが、名詞化においてはその必要がないようである。

- (29) a. * 君は寝付きにくい。
b. * 太郎は歩きにくい。
c. * 学生はこの辞書が使いやすい。 (Inoue 2004a)

- (30) a. [君の寝付きにくさ]は病的だ。
b. [太郎の歩きにくさ]を言っているのだ。
c. [学生のこの辞書の使いやすさ]には定評がある。

これに関しては、名詞化した場合には、当然、先の条件は、それを含む文に関しての条件となるので、ここでは関係がなくなるからである。

3.3 タイプ3の名詞化

タイプ3は、補文に動作主を取る必要がなく、補文の格変化は難易形式によるものではなく、補文の述語の性質によるものであった。

- (31) a. 洗剤は湯に溶けやすい。
 b. 布が厚くて、針が通りにくい。
 c. 高い所の張り紙は人に剥がされにくい。
 d. 聴衆には君の声が聞こえにくい。
 e. 良い候補者が見つかりにくい。
 f. あなたの説明はわかりにくい。 (Inoue 2004a)

これらを名詞化すると次のようになる。

- (32) a. 洗剤の湯への溶けやすさ
 b. ジーンズの針の通りにくさ
 c. 高い所の張り紙の (人による) 剥がされにくさ
 d. 聴衆への君の声の聞こえにくさ
 e. 良い候補者の見つかりにくさ
 f. あなたの説明の分かりにくさ

タイプ3 難易文における難易形式の項構造として内項のみ1つ取ると Inoue では分析されている。そうすると「の」で表示されている名詞句の意味役割は、補文の述語から与えられていると考えるのが当然であり、経験者が現れないのでタイプ1・2のような問題は起こらない。

3.4 タイプ4の名詞化

最後のタイプは「やすい・にくい」の解釈が傾向の解釈になる点が他のものと異なっていた。

- (33) a. 慌て者は事故を起こしやすい。
 b. 日本人が流行に飛びつきやすい。
 c. エリートは強い挫折感を味わいやすい。 (Inoue 2004a)

名詞化した場合もこの解釈はそのまま引き継がれているようである。

- (34) a. 慌て者の事故の起こしやすさ 「起こしがちなこと」
 b. 日本人の流行への飛びつきやすさ 「飛びつきがちなこと」
 c. エリートの挫折感の味わいやすさ 「味わいがちなこと」

以上をまとめると、いずれのタイプの場合も名詞化は可能であり、元になる難易文との平行性が保たれている。但し、意味役割に関してはタイプ1・2における経験者と動作主の問題が生じていることを見た。

4. 分析

4.1 難易文名詞句の構造と意味役割付与

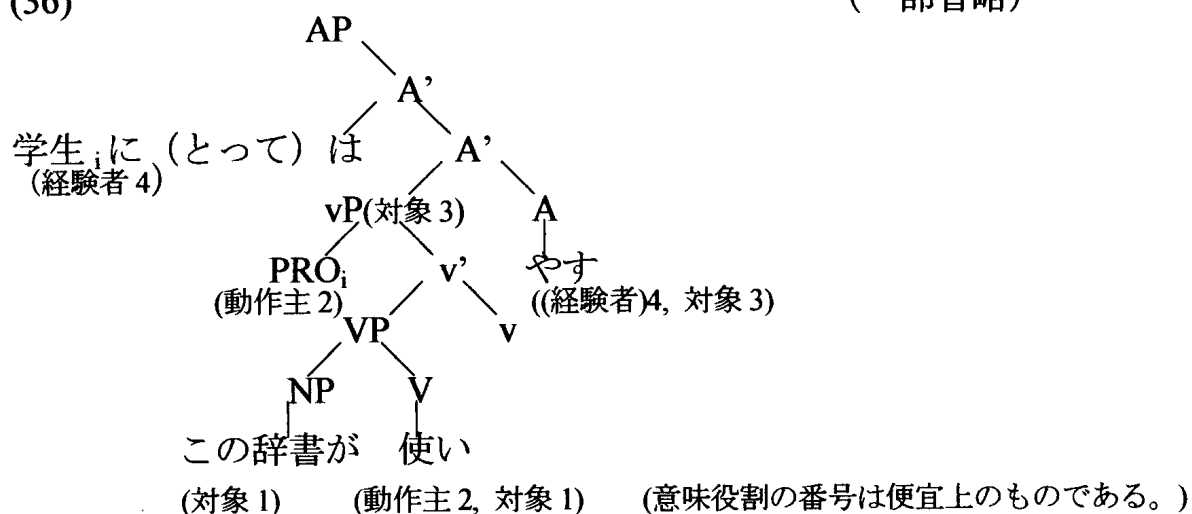
前節で見てきたように、基本的には難易文の文と名詞化には平行性が見られるわけであるから、文における分析をそのまま名詞句に適用すれば良いように思われる。つまり、どのように難易文を分析しようとその分析を名詞句にも適用するわけである。もちろん、格の現れ方が違うのは、文と名詞句の違いから来るわけである。次の例を考えてみる。

(35) 学生に (とって) はこの辞書が使いやすい。

井上 2004a, b はこの難易文を次のように分析している。⁶

(36)

(一部省略)



概略を述べると、「やすい」が内項として vP 補文を取り、外項は投射し

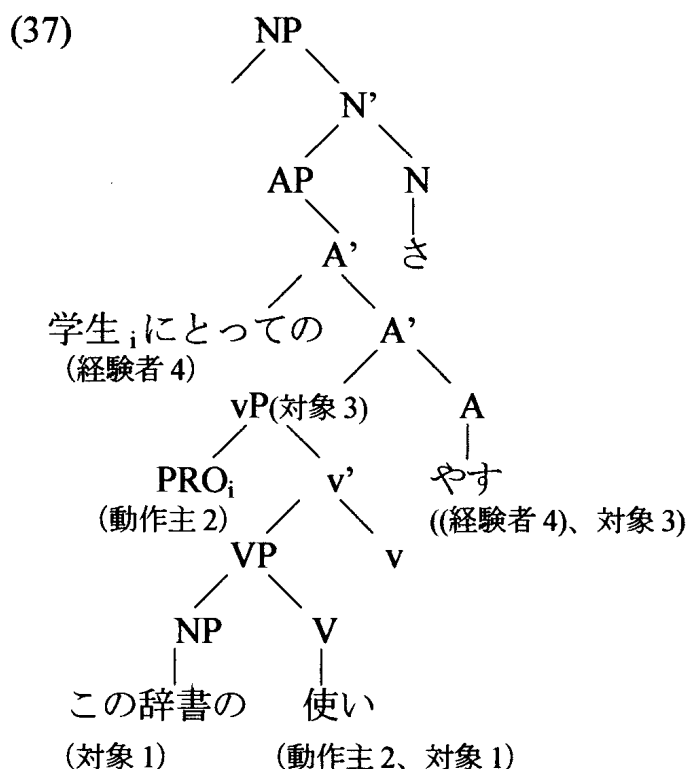
⁶ Inoue 1978 では、当時の枠組みで以下のように分析している。細かい点では、「学生にとって」の扱いが項か付加詞かの違いがあるが、本質的には(40)と同様である。

i. [s [NP 学生][NP [s [NP 学生][NP この辞書][Pred 使う]]][Pred やすい]

また、「に」格主語を取り扱っている Ura1999 に極小主義の枠組みでの可能形式の「られ」の分析がある。細かいシステムが異なっているが、そこでの構造は Inoue1978 の難易文の構造と同様のものを仮定している。この分析が正しければ、(i)も極小主義で捉え直すことが可能であり、その妥当性もかなり検証済みということになるであろう。

ない。さらに、「～にとって」は付加詞として扱っている。「が」格目的語の「この辞書が」は、焦点として捉えられるので後に CP の指定部に移動し、そこで認可されるとしている。意味役割はそれぞれ「学生にとって」は付加詞であるが、経験者を与えられ、PRO が動作主、「この辞書が」が対象を与えられている。

そこでこの分析をそのまま名詞句に持ち込み平行性を捉えるのが一つの可能性である。⁷



この場合、意味役割の付与に関しては文の場合と同様である。「の」格の認可に関しては、どの様な認可の仕方をするかによって異なる。例えば井上 2004 のように、焦点によって認可すると仮定すると「この辞書の」も同様に焦点として認可するのかという問題が生じる。その際、どの機能範疇がそれを認可するのかという問題も生じる。一方、Takezawa 1987 のように「が」格を時制辞の T(ense)に関連して認可させるとすれば、名詞句にも機能範疇の D(eterminer) を仮定してそれに関連して認可させる

⁷ この節では、議論に直接関係しないと思われるので、名詞句の構造に DP を仮定はしていないが、DP を仮定した場合は、「さ」が投射する NP の上に DP が来ることになる。

ことが可能である。⁸この場合、もともと「が」格とは関係のない「学生にとっての」もDに関連させての認可となる。

しかし、(37)のような分析は、次のように難易文と名詞化において差がある場合にはそれが何故かを説明する必要が出てくる。次の例は「方-名詞句」における物である。

- (38) a. チョコレートを買ってさえもらう。
b. チョコレートを買ってさえもらう方法
c. ?*チョコレートを買ってさえもらい方 (星宏人氏 (私信))

「方法」「方」は名詞化において異なる構造を持つ。「方法」による(38b)は(38a)と「さえ」に関して同じ特徴を持つ。一方「方」は「方法」と同じ意味を持ちながらも、「さえ」に関して異なる特徴を示す。

「さ」による名詞化の場合も以下に示すように「方-名詞句」と同様の振る舞いをすることは当然予測されることである。

- (39) a. 太郎にとってその鞆が開けさえ・も・だけしにくい。
b. * [太郎ことつてのその鞆の開けさえ・も・だけしにくさが問題だ。

これは、「さえ・も・だけ」が名詞化(名詞句)の内部において不可能であるということではないのは、次の例からも分かる。

- (40) a. それは太郎だけの問題だ。
b. * それは太郎も・さえの問題だ。
c. 太郎にとってのその辞書だけの使いやすさ

確かに「も・さえ」は「の」に付かないが、「だけ」は問題なく「の」にも付く。そして、ここで大切なのは、表面上述語に「さえ・も・だけ」が付いているときに、難易文自身と難易文の名詞化において何か違いが起きているということである。もし難易文自身と同様のものを名詞化に

⁸ Takezawa 1994 では、DP/PP 等の「の」格はNP 内で認可される default case としているのでD によるものではない。但し、一部はDP 内 Agr の指定部で随意的に認可されるとしている。名詞句内での移動が関連しているので詳しくはそちらを参照。

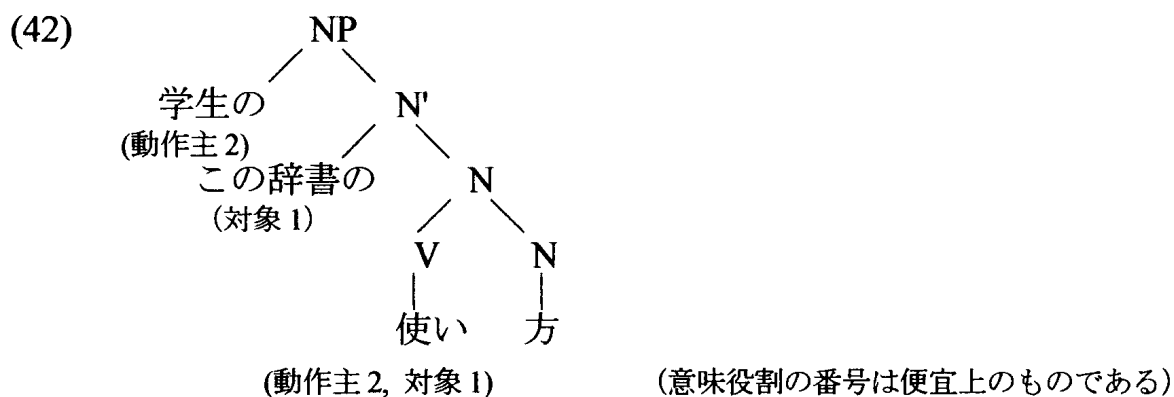
も仮定した場合、この差を構造以外の何処かに求めなければならない。

以上が、難易文における構造を一部そのまま名詞化にも適用した場合の意味役割付与と格の認可の仕方とその問題であるが、難易文の名詞化と同様の特性を持つ「方-名詞句」も考慮にいと、別の分析が可能である。

4.2 「方-名詞句」との平行性

難易文においては「さ」を用いて名詞化するわけであるが、この「さ」と同様の特性を持つものとして「方」がある。Hoshi 2002b では、願望を表す「たい」とその名詞形「たさ」を「方-名詞句」と同様の特性を示すとして議論されている。その特性とは、述語の項が「の」格で具現化すること、統語的要素の使役形、受身形等が前に来られること、述語の形態が所謂連用形をしていること、そして時制辞の T を含んでいないと考えられることである。⁹Hoshi 2002b 等での分析を試みる。

- (41) a. 学生がこの辞書を使う
 b. 学生のこの辞書の使い方
 c. 学生のこの辞書の使いやすさ



これは、主要部直接付加構造である。意味役割付与に関しては(5)から、Vとその項がNという語彙範疇内にあるので、Vがこの位置から「学生の」と「この辞書の」に意味役割を付与する。「の」格に関してNがそ

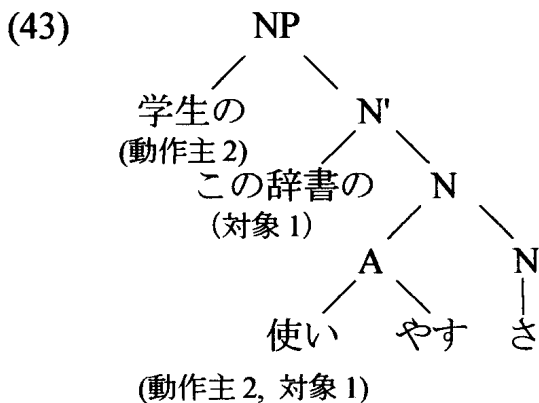
⁹ Tがないことと「方-名詞句」でVがVPを投射しないことは関連している。詳しくは、Hoshi 2002b の note 10 を参照。

の認可を担っている。

この場合、文における構造をそのまま持ち込むことはしていないので文と名詞句との構造的平行性は失われているが、それは、日本語の軽動詞などにおける分析との関連や、経済性等の理由から、この構造を主張している。¹⁰

さて、願望の名詞形「～したさ」においても同様に主要部直接付加構造が強制されるならば、難易文の名詞化においても「さ」を使う以上、同様の構造になると考えるのが自然である。

実際、Sugioka 1984 では、その生産性や意味の透明性から判断して「さ」接辞による名詞化は統語的プロセスであるとしている。具体的な構造を名詞化に対しては与えていないが、論旨からして以下の構造と同等のものを仮定していると思われる。¹¹



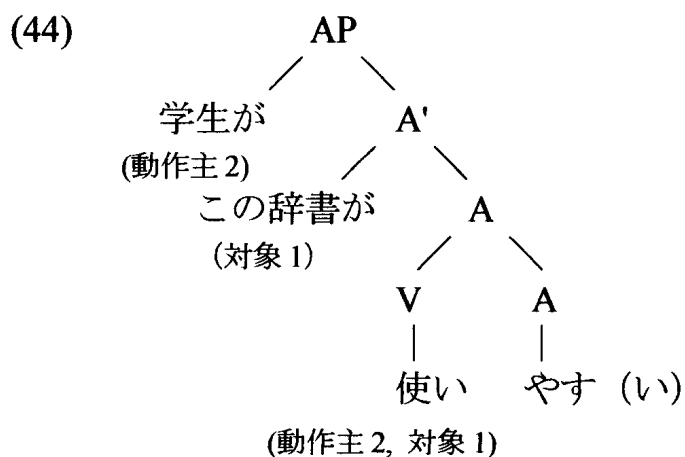
(43)は主要部直接付加による難易文の名詞句の構造であるが、「方-名詞句」との平行性が見てとれる。まず、「使う」の項と考えられる「学生の」と「この辞書の」が「さ」による投射 N 又は N' と姉妹関係になっている。意味役割付与に関しては、述語の「使う」の動作主と対象がそれぞれ「方-名詞句」と同様に付与されている。ここでは、難易形式の意味役

¹⁰ 「方-名詞句」における「上手な」の解釈や、可能文における量化名詞句の解釈等から、主要部直接付加構造を支持している。詳しくは Hoshi を参照。

¹¹ 異なる文脈で難易文の名詞化に言及しているのと、枠組みが当時のものということもあるが、実質的にはここでのものと同様であると考えられる。但し、意味役割がどう与えられるかについては、本稿での例を扱えるくらいの詳しい議論はしていない。また、1992 では、少々異なる構造を仮定している。詳しくは Sugioka 1992 を参照。

割はどうなるのかは説明の便宜上除いているが、詳しくは後ほど 4.3 項で議論する。

以上、「方-名詞句」と「さ」による難易文の名詞化の共通性を捉えている一方で、難易文とその名詞化においては構造的共通性がないという分析に一見思える。しかし、実は、難易文自身も「さえ」等を含まない単純な場合は Hoshi のいう(5)に従った名詞化と同様の構造を持つと考えることができる。¹²



難易形式が VP を補文にとり、その VP 内にその項を取るとする分析とは異なり、V の項が難易形式である「やすい」が投射する A または A' と姉妹関係になっている。勿論、他の現象との関わりでこの構造の妥当性が検証されるわけであるが、もし、(44)が正しいとすれば、難易文とその名詞化における項の現れ方における構造的平行性も、単純な場合は、「方-名詞句」とのそれに加えて、捉えられることになる。

4.3 難易名詞句における意味役割付与

この項では前項で見た主要部直接付加構造を用いて難易文の名詞化を分析する。議論をする上で難易形式の項構造を Inoue1978 に従い次のように仮定する。タイプ 1・2 では難易形式の「やすい」が 2 項述語であり、外項として経験者を取り、内項として対象を取る。¹³タイプ 3・4

¹² 必ずしもこの構造が強制されるわけではない。「さえ」等があれば構造が名詞化と異なる可能性がある。

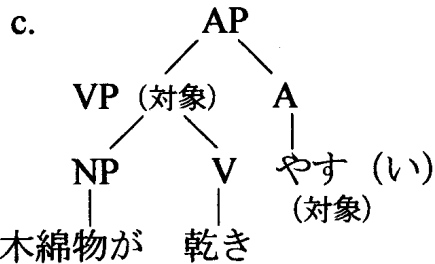
¹³ 最近の Inoue 2004a, b では、Inoue 1978, Kuroda 1987 と異なり、「にとって」を付加詞と

は難易形式が内項のみを取る1項述語であるとする。

まずは、タイプ3と4から見てみる。タイプ3と4は、Inoue 1978では難易形式「やすい」が外項を投射せずに内項として補文(ここではVP)を取ると分析されている。((46)はInoue 1978を捉え直したものである。)

(46) a. [[_{AP}[_{VP} 木綿物が乾き]やすい] タイプ3

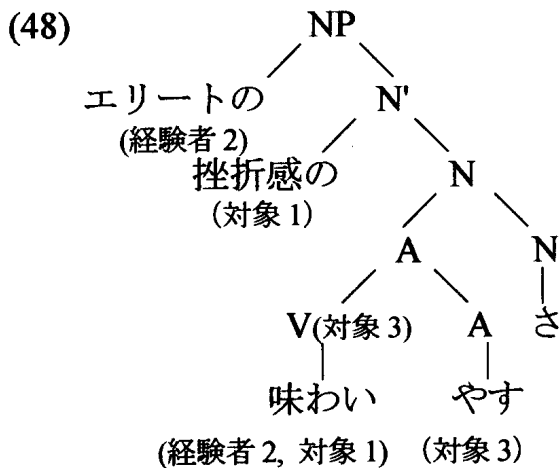
b. [[_{AP}[_{VP} エリートが挫折感を味わい]やすい] タイプ4



(47) a. 木綿物の乾きやすさ タイプ3の名詞化

b. エリートの挫折感の味わいやすさ タイプ4の名詞化

タイプ4の名詞化を例にとってみる。意味役割としては、「やすい」が内項として対象(命題)を取ると分析されている。名詞化においては主要部直接付加構造を用いると以下のようなになる。



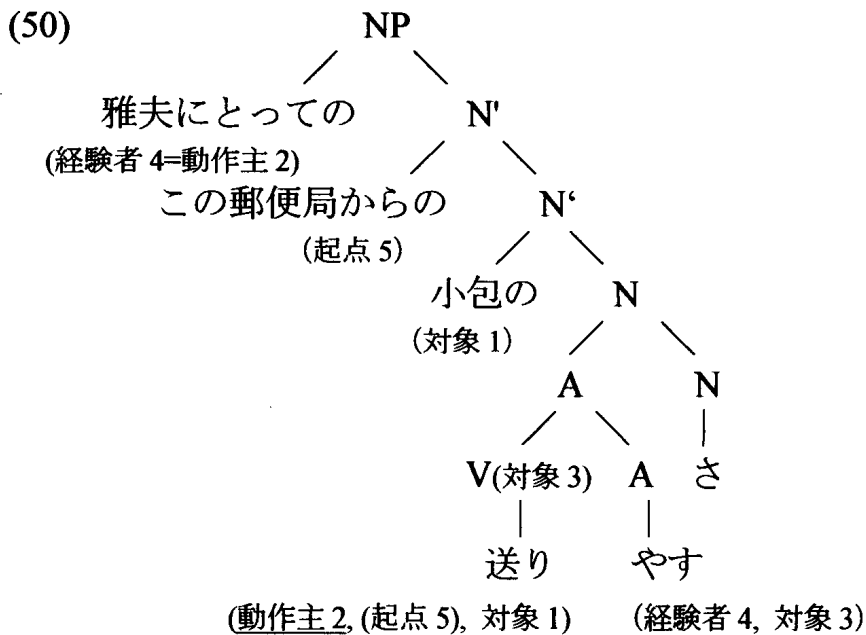
まず、「味わう」の項は、経験者と対象と仮定する。この経験者は「やすい」の経験者ではないので注意を要する。また、「やすい」が取る対象は主要部直接付加が起こるときに与えられるとする。「味わう」の意味役割

して扱っている。

の対象が「挫折感の」に、経験者が「エリート」に与えられる。「の」格の認可については、ここでは Hoshi と同様に N または N' の姉妹関係にある名詞句等が「の」を認可されると仮定する。¹⁴

次にタイプ 1 とタイプ 2 の名詞化をしてみる。タイプ 1 はより複雑な Kuroda の例を分析してみることにする。

- (49) a. 雅夫にとってこの郵便局からが小包が送しやすい。
 b. 雅夫にとってのこの郵便局からの小包の送りやすさ



先ず、「送る」の項を動作主と対象とし、さらに任意の付加詞を起点とする。そして、Inoue 1978, Saito 1982, Kuroda 1987 等のように難易形式の「やすい」は、タイプ 3, 4 と異なり、経験者と対象を取ると仮定する。この経験者が付加詞かどうかは議論が分かれるところだが、本稿では項と捉えておく。

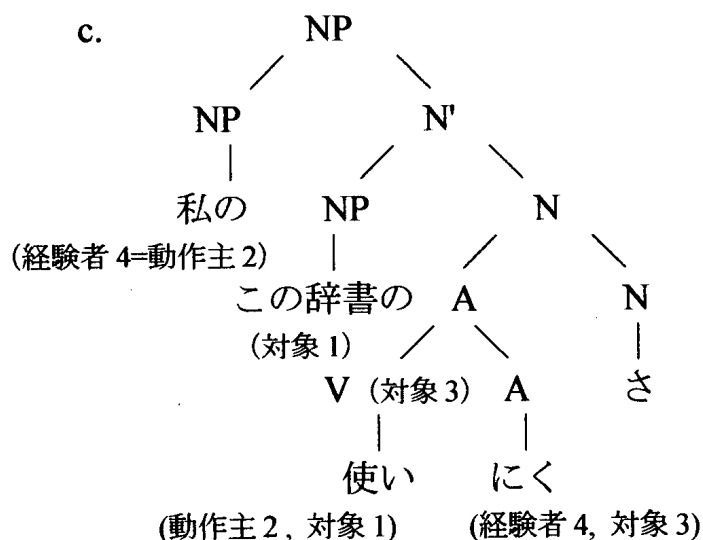
さて、ここで問題となるのは、前節でも簡単に述べたように、「送る」の動作主と「やすい」の経験者が、同じになるわけであるが、VP を仮定しその内部に PRO を生成していない以上、特に動作主はどうなってしまうのかということである。別の言い方をすると、コントロール関係が

¹⁴ 「～による」は「の」は必要ない。「による」と「の」の関連、また、「の」の認可につい

ある場合はどうなるのかという問題である。PRO を仮定して構造的にコントロールを捉えることもできるが、本稿では Hoshi 2002 と同様に述語と述語の意味役割間の関係として捉えることにする。¹⁵このことは Inoue 1978 が難易形式の補文は[+self controllable]であり、結果補文の主語が有生名詞（動作主）でなければならないといていることを別のレベルで捉えていることになる。具体的には、(50)の「送る」の動作主と「やすい」の経験者が同一になるということを意味役割間において何らかの方法を用いて捉えるということである。ここでは、細かい実行の仕方は異なるが Hoshi と同様に、経験者が与えられるときに動作主も与えられると考えておく。そうすると、付加詞も含め(50)のように意味役割が与えられることになる。¹⁶

タイプ2は基本的にはタイプ1と同様であるが、経験者の「にとって」が現れないことと、主語の判断を表して1人称主語でなければならないなかった。

- (51) a. 私はこの辞書が使いにくい。
 b. 私のこの辞書の使いにくさ
 c.



この場合もタイプ1と同様に、コントロール関係を「動作主」と「経験

ては、Takezawa 1994 を参照。

¹⁵ 詳しくは Hoshi 2002b の note 9 を参照

¹⁶ 付加詞も項と同様に捉えられるべきであるという議論は藤巻 2003 を参照。

者」の間で捉えることになり、経験者を与えるときに動作主も与えらる。その他の意味役割は問題なく与えられる。

以上、難易文の名詞化において主要部直接付加構造を与え、どのように意味役割が与えられるかを考察した。次に名詞化と元になる文における差をどう説明するかを見る。

4.5 難易文とその名詞化の相違点

先に難易文とその名詞化における相違点として「さえ」等の例を挙げた。

- (52) a. 太郎にとってその鞆が開けさえ・も・だけしにくい。
b. * [太郎こつてのその鞆の開けさえ・も・だけしにくさ]が問題だ。 (=38)

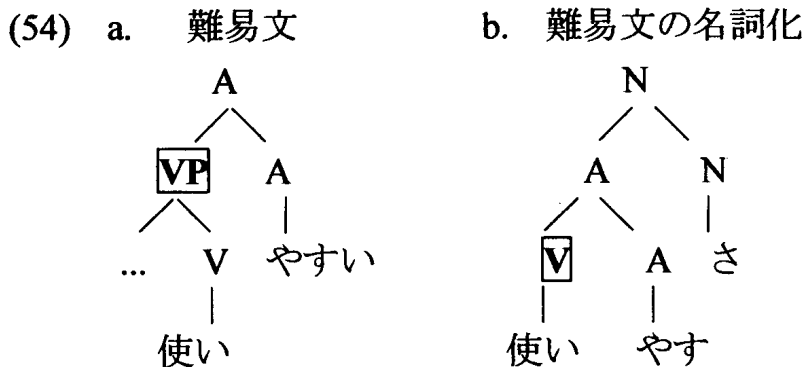
これを分析するに当たり、「さえ・も・だけ」が何に付いているのかが問題になる。Tateishi 1994 が Hoji et al. の観察に基づき以下の例を挙げ「は」等が、VP に付くとしている。(下線部等筆者加筆)

- (53) a. [VP 寿司を食べ]_i はジョンは t_i した。
b. * [寿司を昨日食べ]_i はジョンは t_i した。
c. * 食べは_i ジョンは [VP 寿司を t_i] した。 (Tateishi 1994)

主語の「ジョンは」が VP の外にあるということを議論しているが、そうだとすると目的語を含んだ VP を移動することはできるが、それより大きい単位や逆に小さい単位は移動できない。このことから上記の例で関与しているのは VP 移動であるとしている。そうだとすると「は・さえ・も」等は VP に付いていることになるわけである。

これを用いると、(52)の差は少なくとも主要部付加構造を強制される名詞化とそうでない文との差として説明が可能である。先ず、名詞化においては主要部が直接他の主要部に付加されている。これは、星宏人氏(私信)によると、T のサイクルにある V のみが投射するとしたら、T が欠如している「方-名詞句」(ここでは、「さ」による難易文の名詞化)において V が投射せず N(「方」または「さ」)に直接付加を強制されるからである。そうすると、VP を投射する文とは異なることになる。

もし、そうだとすると、星氏が指摘しているように、主要部付加構造をしている名詞化においては、(54b)のようになり、その間に「さえ」等が入り込めない（Vに「さえ」等が付かない）。一方、難易文の方は主要部直接付加構造を強制されないのでVP補文を難易形式「やすい」が取るとすれば、「さえ」が入り込む（VPに「さえ」等が付く）ことが可能である。



以上、難易文とその名詞化における差をその構造的差に帰する説明を試みた。難易文の名詞化に主要部直接付加構造を与えることで「さえ」等が付いたときの難易文自身との差が捉えられることを見た。次の節では、主要部直接付加構造における主語の問題を尊敬形と「自分」の束縛を用いて考察する。

5. 難易文の名詞化における尊敬形と束縛

この節では、難易文の名詞化における尊敬形の問題と「自分」の束縛について考察する。難易文におけるこれらの現象は、基本的に「に」格主語の文と同じ振る舞いをするのが観察される。¹⁷これは、「にとって」と「に」の関係を考えれば当然である。もし、「にとって」も名詞句内において主語と認定できれば当然主語尊敬形を許すことが予想される。

以下、難易文の名詞化においても難易文と同様に尊敬形と束縛が可能であり、それをここでの分析でどう捉えていくかを考察する。特に主要部直接付加構造における主語に関して問題を扱い、解決の方向性を示す。

¹⁷ 「に」格主語が、主語の振る舞いをするのは Ura 1999 とその文献を参照。

5.1 名詞化における尊敬形と束縛

Harada 1976 において名詞化における尊敬形が議論されているが、以下のように名詞句内でも文と同様に、主要部の名詞に尊敬形が現れる。(下線部は筆者加筆)

(55) a. 山田先生のアメリカへのご出発

b. * 私の妹のアメリカへのご出発 (Harada 1976)

そこで名詞句においても「山田先生の」や「私の妹の」を主語と認定し文と同様にこの現象を扱っている。

Takezawa 1994 では、名詞化において「による」に対しても尊敬形が可能であるとして以下の例を挙げている。(下線部は筆者加筆)

(56) a. 先生の教え子に対するご批判 DP-subject

b. 先生による教え子のご紹介 PP-subject

(Takezawa 1994)

Takezawa では、DP の指定部 (DP 内の Agr の指定部) にある DP や PP と尊敬形式の主要部が一致するとしている。下線を施した DP または PP が DP 内の Agr の指定部にあり、尊敬形と一致すると分析されている。¹⁸ 概略以下の構造になる。

(57) [DP [AgrP [PP 先生による]_i [Agr' [NP t_i [N' 教え子の t_j] ご紹介]_j+Agr]]D]

また、「による」句は自分の束縛も可能であるとしている。

(58) ジョン_iによる自分_iの友人の殺害 (ibid)

(58)においては「ジョンによる」が主語として働き自分を束縛すると言うことである。

以上、名詞句内での尊敬形と「自分」の束縛の可能性について簡単に見た。これを踏まえた上で難易文の名詞化における同様の現象を考察す

¹⁸ Takezawa 1994 ではDP内の名詞句の移動(A-移動)を扱っている。その際の移動は、「の」格の認可によるものではなく、一致によるものであるとしている。

ることにする。

5.2 難易文の名詞化と尊敬形

この項では、難易文の名詞化における尊敬形について観察する。先ず、以下の例は、タイプ1 難易文において「にとって」で現れる経験者名詞句に対して尊敬形が可能であることを示している。¹⁹

- (59) a. 先生にとってこの種の魚がお召し上がりになりにくい。
b. 先生にとってこの本をお読みになりやすい。
c. お客様にとってこの電話がお使いになりにくい。 タイプ1
- (60) a. * 太郎にとって山田先生がお話になりにくい。
b. * 太郎にとって山田先生がお誉めになりにくい。

これは、「にとって」が主語である可能性を示していて、後に見る「自分」の束縛と同様である。さて、(60)の例の名詞化において尊敬形はどうなるであろうか。²⁰

- (61) a. [先生にとってのこの種の魚のお召し上がりになりにくさ]を今話しているのです。
b. [先生にとってのこの本のお読みになりやすさ]はいうまでもありません。
c. [お客様にとってのこの電話のお使いになりにくさ]が問題なのです。
- (62) a. * 太郎にとっての山田先生のお話になりにくさ...
b. * 太郎にとっての山田先生のお誉めになりにくさ...

以上のように名詞化においても難易文自身と同様に、「にとっての」で現れる経験者に対して尊敬形が可能である。

上記の例はタイプ1の名詞化であるが、他のタイプも尊敬形が可能で

¹⁹ 難易文自身の尊敬形に関しては、Harada 1976にて次の例が尊敬語化についてのサイクルを議論しているところで扱われている。(i)はタイプ2の難易文になる。

i. 田中さんは英語ではお話になりにくいそうです。

²⁰ 難易文の名詞化において尊敬形が現れることは「方」と同様であり、このことは、Sugiokaの観察からの当然の帰結である。

あると思われる。

- (63) a. 山田先生がこの辞書がお使いになりにくそうです。 タイプ2
b. 先生方が学生の変化にお気づきになりにくい。 タイプ3
c. お年をお召になられた先生が物事をお忘れになりやすい。 タイプ4
- (64) a. [山田先生のこの辞書のお使いになりにくさ]
b. [先生方の学生の変化に対してのお気づきになりにくさ]²¹
c. [お年をお召になられた先生の物事のお忘れになりやすさ]

さて、ここで問題となるのは、どのように尊敬形を捉えるかである。特に名詞句内の主語について主要部直接付加構造においてどう捉えるかという問題である。これに関しては、以下 5.4 で考察する。その前に自分の束縛についても同様の問題があることを簡単に見ておく。

5.3 難易文の名詞化と束縛

この項では、「自分」の束縛に関して、難易文とその名詞化における現象を観察する。基本的には尊敬形と同様の現象が観察されることを見る。先ず、タイプ1 難易文においては、以下のように、「に (とって)」で現れる経験者が「自分」を束縛すること可能である。

- (65) a. 太郎_iにとって自分_jの親が誉めにくい。
b. * 自分_jの親にとって太郎_iが誉めにくい。
c. [自分_jの親が]_j太郎_iにとって_{tj} 誉めにくい。
d. * [太郎_iが]_j自分_jの親にとって_{tj} 誉めにくい。

タイプ2は、どちらの「が」格名詞句が主語として振る舞うかという問題があるが、以下のように動作主の「が」格名詞句が「自分」の先行詞として振る舞う。

- (66) a. 太郎_iが自分_jの子供が叱りにくがっている。

²¹ 「学生の変化に」は名詞句の中では「学生の変化に (へ) の」といえないので「学生の変化に対しての」に変えてある。

b. * 自分_iの親が太郎_jが叱りにくいがっている。

タイプ3・4は、難易形式が補文を取るとされているので、その補文内での主語を「自分」の先行詞として取るのは当然である。

(67) a. [花子_iが自分_iの上司に信頼され]にくい。

b. * [自分_iの部下が花子_jに信頼され]にくい。

(68) a. [太郎が自分の子供を誉め]やすい (がちだ)。

b. * [自分の親が太郎を誉め]やすい (がちだ)。

さて、次に名詞化において「自分」の束縛がどうなるかを観察してみる。以下それぞれタイプ1からタイプ4の名詞化における「自分」の束縛についての例である。²²

(69) a. 太郎にとっての自分の親の誉めにくさ

b. * 自分の親にとっての太郎の誉めにくさ タイプ1

(70) a. 太郎_iの自分_iの子供の叱りにくさ

b. * 自分_iの親の太郎_jの叱りにくさ タイプ2

(71) a. 花子_iの自分_iの上司からの信頼のされにくさ

b. * 自分_iの部下の花子_jからの信頼のされにくさ タイプ3

(72) a. 太郎_iの自分_iの子供の誉めやすさ (誉めがちなこと)

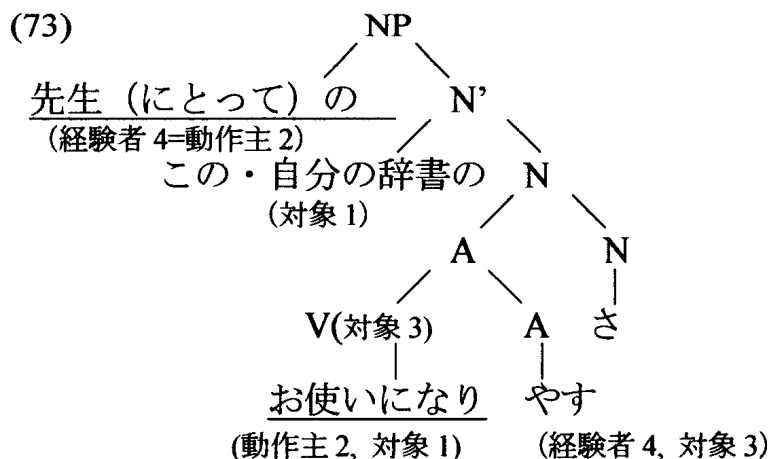
b. * 自分_iの親の太郎_jの誉めやすさ (誉めがちなこと) タイプ4

これらは基本的に名詞化においても難易文自身と同様であることを示している。そうであるとするとは尊敬形における問題と同じ問題が生じる。つまり、主要部直接付加構造を仮定した場合に、その内部で主語を認定する必要があるが、それをどうするかという問題である。以下、これに関して解決の方向性を示してみたい。

²² 「太郎」を「誰」に変えて変項束縛にしても基本的に同じである。

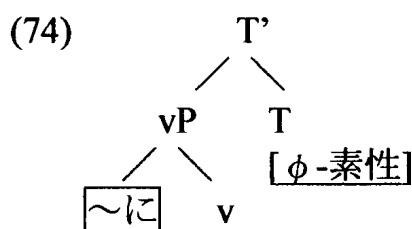
5.4 名詞句内の主語についての分析

問題をもう一度確認すると、(73)のように主要部直接付加構造を名詞化に与えているので、これにおいて主語をどう捉えるかという問題である。また、別の問題として、本来意味役割を与えているのは動詞又は形容詞であるのに、それとは関係のない投射(NP)の指定部にある要素と動詞の間での一致現象(Agreement)と捉えなければならないことである。²³



ひとつ目の問題に対しては、Harada 1976, Takezawa 1994 の分析を受け継ぎ、Ura 1999 の分析を名詞句に適用して、名詞句の指定部の位置にある NP/PP を主語と認定する方向で解決を試みる。

まず、Ura 1999 では「に」格主語が T の ϕ -素性と Chomsky 2001 等と言う一致(Agree)することで文における尊敬形を捉えることを提案している。概略以下のようなになる。(詳しくは Ura 参照)

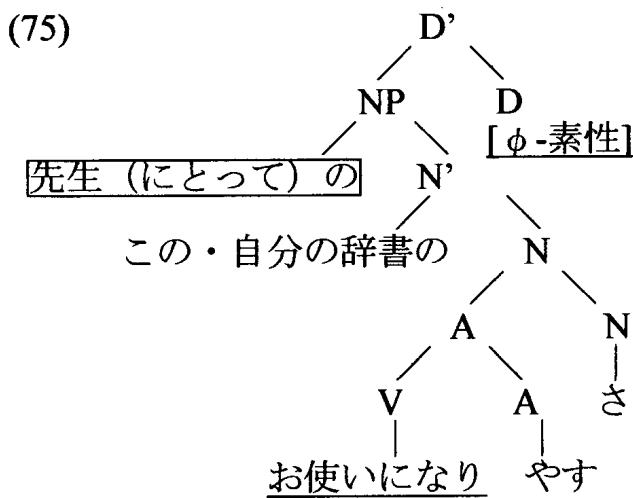


囲みを施した「に」格主語と T の ϕ -素性が一致する。この一致を介して「に」格主語と動詞の尊敬形を捉えるのである。

この分析を考慮に入れると、やはり、名詞化において Takezawa 1994

²³ 「お使いになり」の内部構造に関しては Harada 1976, Kageyama 1993, 久野 1989 を参照。

と同様に、T と並行的な機能範疇 D を名詞化に仮定し、NP の指定部にあるものと D の ϕ 素性との一致が介在した現象として捉えるという可能性が出てくる。²⁴



(75)の構造において、先ず NP の領域で意味役割が与えられる。次に D の ϕ -素性と NP の指定部の NP (正確には DP) が一致する。基本的には Agr を仮定しないが、Takezawa の分析と同様になる。最終的には、D と V の関係として (つまり、主要部同士の関係として) 尊敬形を捉えるということである。

尊敬形と自分の束縛に關与する c-command に関しては、(75)において基本的に成り立つので、これに関しては問題がない。

一つ問題として残るのは、何故、難易形式の「やすさ」や NP の主要部の「さ」が尊敬形にならずに「使う」が尊敬形になるのかという点である。これに関しては、少なくとも「やすい」と「さ」は主要部としては機能するが、他の要素と付かなければならない拘束形であることと関係があるように思われる。しかし、久野 1989 での分析のように尊敬形がもっと複雑な構造をしている可能性もあり、ここでは深い分析に立ち入らず、今後の課題とする。

²⁴ D を仮定しても今までの意味役割に関する分析には影響はない。

6. まとめと今後の課題

本稿では難易文の名詞化に焦点を当て Hoshi 2002 等における意味役割に関する理論を仮定し、その構造と意味役割の与えられ方を検討してきた。特に Sugioka 1984, 1992 の「さ」の分析を基に、実質的にはそれと同様の主要部直接付加構造を与え、その構造における意味役割付与の問題に関して議論した。難易文の名詞化に対するここでの分析が正しいとすると、対応する難易文においても主要部直接付加構造が許される可能性を示唆している。そうであれば、Hoshi の意味役割に関する理論に対して、「方-名詞句」における使役・受け身と同様に、難易文とその名詞化という一つ重要な領域を説明可能なデータとして追加することになる。

今後の課題としては、上記の敬語の問題の他、以下の3点が考えられる。先ず、Takezawa 1987 でいうように、もし日本語の難易文に空演算子の関与しているものとそうでないものの2種類があるとすると、特に空演算子の関与している方の名詞化をどう説明するかが問題となる。

次に、以下のように難易形式の補文の述語「言う」が取る補文の述語である「購読する」の項が「が」格で出ている（長距離の）難易文がある。

- (76) この手の雑誌がジョンにとって[CP 毎月 (pro / それを) 定期購読していると人に言い]にくい。 (Takezawa 1987、一部変更)

この難易文の名詞化は少々言いづらいものの良さそうである。

- (77) この手の雑誌のジョンにとっての[CP 毎月 (pro / それを) 定期購読していると]の人への言いにくさ

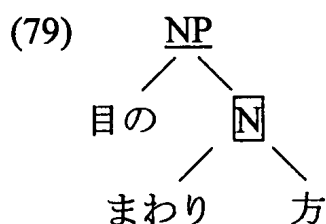
ここで問題となるのは、「この手の雑誌の」が「定期購読する」から意味役割を与えられるべきであるが、それをどう直接付加構造において成すかということである。勿論このことは、難易文自身においてもどうするかの問題があるわけである。何故かという、(5)を仮定した場合、補文のCPが「購読する」と「この手の雑誌の (が)」との間に介在し、意味役割付与を妨げると考えられるからである。これに関しては、再述代名

詞(resumptive pronoun)が可能であることに関連して、そこから意味役割を与えられるという可能性があるので、日本語における再述代名詞の分析に依存する形での解決と言うことになる。

最後に、イディオムに関する問題がある。Sugioka 1992 において「方」・「さ」による名詞化はイディオムをその内部に許すとし(78a, b)を挙げている。(下線部加筆)

- (78) a. 目がまわる
b. 目のまわり方 (Sugioka 1992)
c. 目のまわりやすさ

このことが主要部直接付加構造に投げかける問題としては、イディオムを構造的にどう捉えるかというのがある。一般にイディオムが何らかの形で構成素を成しているとする、(79)において述語とその項における位置関係を見ると、構成素を成していないのが問題である。



これに関しては、あくまでも推測でありさらなる検討が必要であるが、次のような方向性がある。語彙領域で意味役割を与えている主要部とその項の間でイディオムの解釈が可能であり、主要部付加構造においては投射する方の主要部がそうされる主要部の役割を担うことが可能であるとすれば、上記の構造においても囲みを施したNと「目の」が構成素をNPにおいて成すことになるというものである。これについてもさらなる考察が必要であり、今後の課題とする。

参考文献

Baker, Mark. 1988. *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*.
University of Chicago Press.

- Chomsky, Noam. 1977. On Wh-Movement, in Culivover, P., Wasow, T., A. Akmajian eds., *Formal Syntax*. 71-132. New York, Academic Press.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by Phase, in M. Kenstowicz, ed., *Ken Hale: A Life in Language*. 1-52. The MIT Press.
- 藤巻一真. 2003. 「名詞化接辞「方」に於ける問題」 *Scientific Approaches to Language* 2:1-24 言語科学研究センター 神田外語大学.
- Grimshaw, Jane. 1990. *Argument Structure*. The MIT Press.
- Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser. 1993. On Argument Structure and the Lexical Expressions of Syntactic Relations, in Hale, K. and J. Keyser, eds., *The View from Building 20, A Festschrift for Sylvain Bromberger*. MIT Press.
- Harada, Shinichi. 1976. Honorifics, in *Syntax and Semantics* 5:499-561, Academic Press.
- Hoji, Hajime, Shigeru Miyagawa, and Hiroaki Tada. 1989. NP-Movement in Japanese, Ms., University of Southern California, Los Angeles, Ohio State University, Massachusetts Institute of Technology.
- Hoshi, Hiroto. 2001. Relations between Thematic Structure and Syntax: a Study on the Nature of Predicates in Japanese, in Lee H. and S. Hellmuth, eds., *SOASWPL*, 203-247. SOAS, University of London.
- Hoshi, Hiroto. 2002a. Theta Theory and Word Formation in Syntax, in J. Abe, ed., *Minimalization of Each Module in Grammar*, 51-79. Tohoku Gakuin University.
- Hoshi, Hiroto. 2002b. Domains for Theta Marking, in *Proceedings of the 2002 Linguistic Society of Korea International Summer Conference II*, 59-70, Kyung Hee University.
- Hoshi, Hiroto. 2002c/to appear. (Non)configurational Theta Marking, in *Proceedings of Linguistics and Phonetics 2002*, Charles University and Meikai University.
- Hoshi, Hiroto. 2003. Domain Merger, talk given at Kanda CLS Colloquium, Kanda

University of International Studies, Chiba, Japan.

井上和子. 1976. 『変形文法と日本語 下』 大修館書店.

井上和子. 1978. 'Tough sentences' in Japanese, in J. Hinds and I. Howard, eds., *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, 122-154, Kaitakusha, Tokyo.

Inoue, Kazuko. 2004. Japanese 'Tough' Sentences Revisited, in *Scientific Approaches to Language 3*(this volume), Kanda University of International Studies, Chiba, Japan.

井上和子. 2004 (近刊) . 「日本語の難易文をめぐって」 『牧野成一先生古希記念論文集』 くろしお出版.

伊藤たかね・杉岡洋子. 2002. 『語の仕組みと語形成』 研究社

影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房

Kaneko, Yoshiaki. 1996. On *Tough* Constructions: A GB Approach, in Ikeya, Akira ed., *Tough Constructions in English and Japanese*, 9-41, Kurosio Publishers, Tokyo.

Kuroda, S.-Y. 1973. Where Epistemology, Style, and Grammar Meet: A Case Study from Japanese, in Stephen R. Anderson and Paul Kiparsky eds., *A Festschrift for Morris Hale*, 377-391. Rinehart and Winston.

Kuroda, S.-Y. 1987. Movement of Noun Phrase in Japanese, in Kuroda 1992:253-292.

Kuroda, S.-Y. 1992. *Japanese Syntax and Semantics*. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

久野暉. 1989. 「敬語文の構造」 『日本語学の新展開』 103-124 くろしお出版

Saito, Mamoru. 1982. Case Marking in Japanese, A Preliminary Study. Ms., MIT.

Saito, Mamoru and Hiroto Hoshi. 1994/2000. The Japanese Light Verb Construction and the Minimalist Program, in R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka, eds., *Step by Step: Papers in Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. 261-295 MIT Press.

Sugioka, Yoko. 1984. Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English, Ph.D. dissertation, University of Chicago.

Sugioka, Yoko. 1992. On the Role of Argument Structure in Nominalization, in

Language Communication and Culture, 10:53-80, Keio University.

杉岡洋子. 1998. 「語形成の生産性とレキシコン」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 30: 267-285.

Takezawa, Koichi. A Configurational Approach to Case-marking in Japanese, Ph. D dissertation, University of Washington.

Takezawa, Koichi. 1994. Movement and the Roles of Case and Agr in Japanese Nominalization Constructions, in Nakamura, Masaru ed., *Current Topics in English and Japanese*, 255-283, Hituzi Syobo, Tokyo.

Tateishi, Koichi. 1994. *The Syntax of 'Subjects'*, CSLI Publications & Kuroshio Publishers.

Ura, Hiroyuki. 1999. Checking Theory and Dative Subject Constructions in Japanese and Korean, *Journal of East Asian Linguistics*, 8: 223-254.

350-1197

埼玉県川越市市場北 1-13-1

東京国際大学

言語コミュニケーション学部・国際関係学部

fujimaki@tiu.ac.jp/QZS01062@nifty.ne.jp